



TITLE:

支那國民經濟序説(下) - 主として官吏資本を中心として -

AUTHOR(S):

大上, 末廣

---

CITATION:

大上, 末廣. 支那國民經濟序説(下) - 主として官吏資本を中心として -. 經濟論叢 1932, 34(6): 942-965

ISSUE DATE:

1932-06-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/130187>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

# 經濟論叢

號 六 第

卷四十三第

行發日一月六年七和昭

## 論 叢

租稅賦課機關の問題

法學博士 神戸 正雄

利子に關する試論

文學博士 高田 保馬

國民所得の分配の型を論ず

經濟學博士 汐見 三郎

魚 食 論

法學博士 財部 靜治

## 時 論

思想對策批判

經濟學博士 石川 興二

## 研 究

集團に就いて

經濟學士 蜷 川 虎三

支那國民經濟序説

經濟學士 大上 末廣

## 説 苑

外米關稅の外米市價に及ぼす影響

經濟學士 八木芳之助

松江藩の人蔘專賣と維新後の處分

經濟學士 堀江 保藏

婚姻率の自律性に就いて

經濟學士 三谷 道麿

## 附 録

新着外國經濟雜誌主要論題

本誌第三十四卷總目錄

## 支那國民經濟序説（下）

——主として官吏資本を中心として——

大 上 末 廣

一、導言

二、官吏の發生と官吏資本の生成（以上前號掲載）

三、官吏資本と經濟組織の變化

四、答覆と批判

五、結語

### 三、官吏資本と經濟組織の變化

以上において、極めて粗雑ではあるが、私は支那に於ける官吏の蓄財について、一應の素描を試みた。かく官吏の手に蓄積せられた富は、然らば、何處に向つて流れ往くか。その一部分は、いふまでもなく、彼らの豪華なる生活と權勢の維持のために費さるゝのであるが、残りの大部分は、まづ土地に向つて、ついで商業、工業、金融業に夫々投下されて、土地資本として、商業資本乃至は銀行資本として活躍するのである。

官吏資本の主要形態は、土地資本である。支那に在つては、最も安全にして且つ最も名譽ある財産形態は土地である。従つて、官吏が自己の資本を、何よりもまづ土地の買收のためにふり向

けるのは、極めて自然であらう。<sup>1)</sup>すでにふれたる如く、五代に舊貴族の消滅したことは、一方には君主獨裁制の確立をもたらしたのであつたが、この事は他方では、人民の財産私有權或は身上の自由權等の諸種の權利の發生とその承認に結果した。また後にみるであらう如く、五胡十六國の亂世に於ける晋室の南渡と之に伴ふ南方の開發は、從來の地方的市場交換の狀態を全國的な市面流通の初期の階段にまで急速に押し進むる有力な素因となつたのであつて、かゝる支那社會の賣買交換の經濟はほゞ宋初までに、その系統と秩序を大體完成した。此らの諸條件を土臺として宋以後に結成した官吏群は、その手にかき集めた巨大なる資本を盛に土地に投下したのであるが、此のために、近代的自由賣買の形態をとつて、土地は急速に官吏の手に集中することゝなつた。それゆゑに、支那に於ける官吏又は前官吏にして、土地の所有者でないものは殆んどなく、土地所有者と官吏とは殆んど同意語となつてゐる。<sup>2)</sup>かくの如くに彼らによつて所有さるゝ土地は、勿論彼ら自身によつて耕作さるゝことなく、凡て小作に附するのである。管理農或は分益小作農の農業經營形態が、比較的廣く支那に行はるゝは、土地所有に及ぼせる如上の官吏資本の影響として把握さるべきであらう。

以上みたる如く、官吏資本の土地投下は、土地の自由賣買と此に伴ふ自由契約に基く小作制度の成立とに道を開くことゝなつた。勿論かく立言することは、支那に於ける土地集中の歴史が、秦漢の昔にまで溯りうる、<sup>3)</sup>といふ事とは決して矛盾しない。唐以前に於ても土地集中の現象の存

1) 東亞同文調查會、前掲書、第一輯、175頁。  
2) 馮和法氏著『農村社會學大綱』186頁、民國二十年、黎明書局刊。  
3) 熊得山氏『中國社會史研究』23頁參照、民國十八年、崑崙書店刊。

したことは、史實に徴して明ではあるが、然し當時に於ける土地移轉の實質的内容をなすものは、強力による土地の收奪であつて、近世法律に觀念せらるゝものとは遙かにかけ離れてゐる。けれど、個人の土地所有權なくして、その權利の移轉を考へることは全く無意味だからである。

然し乍ら、支那國民經濟の研究に従事する『輝ける』一群のマルクス主義者の如くに、歷朝に於ける土地賣買の禁止令やその賣買に附隨する幾多の宗法的・封建的制限乃至は支配的な地代形態たる實物地代や小作契約に隨伴する幾多の封建的負擔をあげて、支那に於ける農業の封建性を立證せんと試みることも、紛ふ方なき誤謬であらう。土地賣買の禁止令は、事實に於いては、たゞ紙のうへの文字にすぎなかつたのであり、また土地賣買に關する幾多の諸制限は、それ自體として、封建的所有關係の本質をなす私法的・公法的權利とは、根本的に異なるのである。支那の支配的な地代形態として實物地代を指摘することは、全くたゞしい。然し乍ら、支那に於ける農民の極度なる貧困こそ發達せる流通經濟の只中に在つても、なほ廣汎な實物地代の成立を可能ならしむる基因をなしてゐるのであつて、市場交換經濟の社會に於ける實物地代とは全くその成立基礎を異にしてゐる。<sup>7)</sup> また小作契約に伴ふ封建的負擔は、小作契約と共に生滅するのであつて、それ自體としては、小作關係の本質的内容を構成するものではあり得ない。

かくて、土地資本として活躍する官吏資本は、宋以後に於ける農業經濟の構成に近代的性質を織り込んだのであつたが、他方では更に耕作・灌溉等の諸器具をして劃期的な發達をなさしめて、

4) 李立三氏、前掲論文、64—7頁。

5) 山名正孝氏、前掲論文、537—8頁。朱其華氏、前掲書、306—7頁等。

6) Wagner, Die Chinesische Landwirtschaft, S.S. 276—287.

7) 嚴靈峰氏『中國經濟問題研究』29—30頁、民國二十年、新生命書局刊。

水車・筒車・耘盪・秧馬等の進歩せる農具は、隨時適宜に使用せられた。これに伴つて、灌漑耕作・肥料耕作は飛躍的な發展をなすにいたり、また農民生産方法も粗放から集約へと轉化するにいたつた。此らの農業技術及び生産方法の發達を土臺として、始めて、農産物の一般的な商品化が可能となつたのであつて、今日支那の農民生産物のうへに最も主要なる地位を占むる棉・茶・煙草等も新なる商品として宋以後の社會に現はるゝことゝなつた<sup>8)</sup>。また毛織物・棉布・髮網・花邊・草帽子・豆油等が主要なる農村の家内工業となつて、廣大なる支那の全土に雜草の如くに繁茂するに至つたのも宋以後である。

以上の如くにして官吏の手に集中する土地は、然し乍ら、支那社會に於ける固有の相續制度すなはち均分を原則とする財産の相續制と過剰人口の存在とに妨げられて、大土地所有にまで發展することは出來ずに、却つて反對に土地の過小分割に陷つたのであるが、この事は如上の生産技術の發達に一定の限度を附與することゝなつた。

農業を去つて商工業に向ふことゝする。私の知れる限りでは、支那に於ける主要なる工業經營形態をなすものは、農村を中心とする問屋工業と、都市に蟠居する工場手工業とであつて、之に僅ばかりの近代工場工業が沿海の大都市を中心とし鐵道に沿ふて散布してゐる。近代工場工業には、茲では立入らないことゝして、前二者についてののみ見れば、此らのものゝ大規模なるものは、直接にか間接にかともかく官吏又はその後裔乃至は之に依附してのみ成長しうる紳商によつて經

8) 秦含章氏『中國農業經濟問題』20—59頁、民國二十年、新世紀書局刊。並に陶希聖氏『中國社會の封建性』60—61頁、滿鐵支那月誌、第三十七號。

營されてゐるが、その主要なる營業形態をなすものは匿名組合の名をもつて呼ばるゝ所のものである。<sup>9)</sup>

支那においては、古來農業は『本業』として尊重せられたのであるが、商業は之とは全く反對に『末業』として極度に賤められてきた。従つて、面子感情の非常に強く支配してゐる支那に於いて、官吏又は前官吏といふ名譽ある地位にあるものが、商業に投資することは、彼らの體面感情の許さない所である。それゆゑに、彼らは好んで先づ土地に投資するのであるが、土地の投資に一定の限度の存在することゝ商業に於ける利益のより大なることは、官吏をして土地投資にのみ留らしめない。そこで彼らは面子感情と『末業』との間に横はる矛盾を、匿名組合なる方法によつて巧に解決しつゝ、盛に商業に投資するのである。<sup>10)</sup> 従つて、匿名組合の存在する所には、必ず官吏資本が存在すると見ることは、大體誤ではないが、しかも匿名組合は、今日にいたるもなほ支那産業組織の主要なる礎石となつて、<sup>11)</sup> その特殊なる機能によつて頑固に資本主義的企業の發生に抵抗しつゝある。

かくの如く、匿名組合の方法をもつて商業の分野に流入する官吏資本は、大規模な問屋としてその姿を現はす。かゝる大規模の問屋は多く、支那にあつては、單に商業のみに従事するのみでなく金融業をもいとなんでゐるが、この事の故に、問屋は直接に家内工業を自己の統制下におくのみには留らず、更に進んで工場手工業をも支配しうるのである。事例を織布業にとる。織布業

9) 東亞經濟調查會、前掲書、第一輯 176—8頁。

10) 東亞同文調查會、前掲書、第十一輯 41頁。

11) 木村増太郎博士『支那の産業組織』289—316頁——『現代支那事情の研究』昭和三年、大阪屋號刊。

は今日支那のいたる所に見出さるゝ普遍的な生産業の一つであるが、家内工業として營まれてゐる織布業は、言ふまでもなく問屋の一切の指揮に従ふ。すなはち、紗緞莊は、自ら機具をそなへ原料を農村から買入れ、之に紡工又は染色を施して、都市又はその附近の農村の機坊に貸與して製織せしむる。この場合、紗緞莊がこれらの機坊に一定の賃銀を支拂ふことは勿論ではあるが、同時に機坊に於ける生産並に經營を一切支配してゐる。かく織布業の問屋は、家内工業を直接に支配してゐるが、更に進んでは、原料の買入を通じて農民を、また資金の貸與を通じて表面獨立せる工場手工業を、夫々自己の勢力下に隸屬せしむることも、普通に見出さるゝことである。<sup>12)</sup> 勿論かゝる一般的な状態は、官吏又は官紳が直接に大規模な手工業的工場乃至家内工業を經營するといふ特殊なる事例を決して排斥はしない。

商業に向つての官吏の投資は、それが一定の階段にまで發達した後に始めて行はるゝものであり、また商業の發達は、工業、農業、交通業等の發達の結果であることは明白である。然るに晋室が江南の地に遷都したことの結果として江淮地方の開發されたこと又この開發を刺戟するに充分なる南方地方の土地の肥沃や富源の豊富さ、並に隋より宋にいたつて南北大運河のほゞ完成したことゝ、之に伴つて諸交通機關の進歩したこと等は、一切の諸生産部門を飛躍的に發達せしめ、従つてまた商業の異常なる發展に道をきり開いた。かくの如き一般的な發展傾向を更に強大ならしめたものとして、當時やうやく隆盛におもむきつゝあつた南方との外國貿易を指摘するは、全

12) Bureau of Industrial and Commercial Information, Chinese Economic Bulletin. Vol. VII, No. 211, 314. Vol. XIII, No. 3, 14. 北京政府經濟討論處『中外經濟週刊』第75, 93, 75號。嚴靈峰氏、前掲書、113頁等參照。



くたゞしい。<sup>13)</sup> かくて、唐を経て宋にいたるまでに、官吏資本は、まづ商業に、ついで工業に投下され始めたと見るべきであらうが、此らの諸産業が一旦官吏資本を吸収するに及んで更に目ざましい發達をとげることゝなつた。かくて、製絲・製紙・製粉・釀造・窯業・染料等の諸産業が、今日支那産業の支配的形態たる問屋工業乃至工場手工業としての形態をとゝのへたのは、唐の中期から宋にいたる迄に於てゝあつた。

以上において、大急ぎに官吏資本の農業並に商工業に於ける活動をみ、またその結果としての此らの諸生産部門の躍進的な發達を概觀した。この様な諸生産部門に於ける急速なる發達は、益々商品生産の普遍化と貨幣流通の深化・擴大とを促進したことは當然であつた。一言にしていへば、財貨の市面集散が市面流通に取つて代られたのである。此らの一連の諸事情に迫られて、支那社會は從來にみられなかつた新なる金融組織を持たざるを得なかつたのであるが、かゝる社會的必<sup>14)</sup>要に應じて、明末、清初に先づ發生したものが、所謂山西票號であつた——このものは辛亥の變に衰滅した——。ついで錢莊・錢舖・當舖等の如き内國金融機關が現はれ、更に清末に於ける諸外國との接觸は、外からの洋式銀行の移植と内に於けるその發生とに結果した。現存の状態についていへば、従つて、支那に於ける金融機關の最高形態は、自由港にあつては内外を含めての近代的諸銀行であり、奥地に於ては錢莊・錢舖・當舖等の内國舊金融機關である。こゝでは、近代的諸銀行にはふれないことゝして、たゞ内國舊金融機關のみを瞥見することゝする。

13) 王堅壁『社會主義中國史』153—17頁。民國十九年、平凡書局刊。

14) 國民政府實業部工商訪問局編『工商半月刊』第三卷第十六、十三、四號、第二卷第二十二號。Bureau of Industrial and Commercial Information; *ibid.* Vol. VII, No. 231, No. 235. Vol. XII, No. 12, No. 1, No. 18. Vol. VIII, No. 272. 北京政府經濟討論處、前掲誌、第80、85、61號、參照。

15) 馬寅初氏『吾國銀行業歷史上之色彩』銀行雜誌、第一卷第一號。

支那自生の内國舊金融機關の發生は、右にみたる如く、基本的には官吏資本發達の結果であつたが、此らのものが一旦成立するに及んでは、自ら官吏資本を吸収することによつて、それ自體の發展を促進したと同時に、官吏資本に新なる進路を拓き開いて、その活動を倍加せしめた事は、諸生産部門に於けると同様であつた。すなはち官吏資本を吸収しつゝ發達した此らの金融機關は、その勢力の増大するにつれて、上に向つては中央又は地方の諸政府にその資金を貸付けることによつて、又下に向つては中小の生産業者や商人に融通をなすことによつて、全支那社會の隅々にまで、完全なる支配網をはり廻らした。内國舊金融機關が官吏資本と不可分の關係にあることは、中央又は地方の諸政府にたいする貸付を容易ならしめたのであつて、この事はやがて、此らの諸金融機關の政治參與となつて現はれた。楊教授の『上海金融組織概要』は、『國家賦稅丁銀亦憑籍票莊以資把注……特開捐例於是捐外加級等事票莊可代承辦也。甚至鑽宮門路運動官欠票莊代輦巨金代爲引進也』<sup>16)</sup>と清末に於けるこの間の事情を明快に指摘してゐる。山西票號は、その盛時においては、かくの如く一國の政治を支配したのであるが、他方では勿論中小の商工業者に資金を貸付け、又かゝる貸付を通じてそれらのものを、自己の支配下に置くことを忘れなかつた。更に進んで、彼らは直接諸生産業例へば茶・綢緞・生絲・棉布・毛皮・雜貨等の經營を自ら行ひ、それらのものゝ内外貿易を殆んど獨占することさへあつた。<sup>17)</sup>票號が清室の滅落と共に消滅し、それに代つて錢莊、錢舖が全盛を謳歌してゐる今日に於ては、かつて票號がつとめた一切の仕事は、そのまゝ錢

16) 楊蔭溥氏『上海金融組織概要』90頁、民國十九年、商務印書館刊。

17) Bureau of Industrial and Commercial Information; *ibid.* 1925, No. 326. 1928, No. 1. 北京政府經濟討論處編、前掲誌、第119號。

莊・錢舖によつて繼承された。具體的にいへば、錢莊・錢舖は金融機關であると同時に、大問屋でもある。大問屋であるが故に、彼らは支那産業組織の根幹をなす手工業的小生産業の組織者としての任務を自ら荷負ふてゐる。<sup>18)</sup>

農業部門に於ける金融機關として、吾々は自作農の領域に於ける商人と小作農の行はるゝ分野に於ける地主とをあげうるが、更に此ら二者の上に君臨する所のものでして、官吏が好んで投資する當舖をあげることが出来るであらう。支那農民の極度なる貧困と彼らを不斷に襲ふ<sup>19)</sup>時には人為的な又時には自然的な諸種の災禍とは、此らの諸金融業者をして高利貸付者として繁茂せしむる廣大なる地盤を提供するのであり、また農村家内工業の普遍的存在は、此らのものに商業資本家としての資格を附與する。一言にしていへば、此らの農村金融業者は、農民への貸付を通じて、やがて土地所有者となり、その生産物の購買者となる。土地所有者は、また時と共に高利貸となり商人となる。<sup>19)</sup>それ故に、土地所有者、商人並に金利生活者は、支那の農村にあつては、官吏資本を統一者とするこゝによつて常に三身一體として存在する。

以上に於いて、大急ぎに支那社會の交通經濟にたいする官吏資本の關係をみたのであるが、總括すればかうである。官吏資本は、直接には大土地所有者となり、大規模の製造業者・商人・金融業者となつて現はれて、此ら諸産業部門の直接的經營を行ふが、自己の直接的經營にもれたものに對しては、幾多の内國諸金融機關を通じて間接の統制を行ふてゐる。

18) Bureau of Industrial and Commercial Information; ibid. 1927, No. 125. Volin and Jolk, A report of the investigation of the Conditions of Agriculture. p. 188.

19) 北京政府經濟討論處、前掲誌、第114號。東亞同文調查會、前掲書、第八輯52、66、589頁。馮氏前掲書、259—67頁等參照。

官吏資本の基礎は、尨大なる人民の存在と支那政治の特殊機能に基く官吏の『中飽』とであつて、その發生は支那に於ける市面流通經濟の生成に先立つてはゐる。言ふまでもなく、かくて生成した官吏資本をして急速に成長せしむる契機となつたものは、宋以後に於ける支那社會經濟の交換集散より賣買流通への發展ではあつたが、然し官吏資本があらゆる諸生産部門にもぐり込んで華かなる活動を開始したことは、一切の諸生産部門のみならず、爾餘のあらゆる社會機構をして自己に隸屬せしむることとなり、全支那社會の經濟組織をより高き發展の段階へと押しすすめた。吾々はこゝに、宋以後に於ける商品生産の躍進的な發達、銀錠の一般的使用、内國銀行の發生、並に國家財政への貨幣經濟の浸入等をみる。此らの基礎のうへに立つて始めて、言葉の嚴密なる意味に於ける商業資本の生成と驚異すべきそれが發達とが可能であつた。それ故に、エル・マデヤール氏が、『支那國民經濟の凡ての場面において、支那の生産組織の凡ゆる場所に於いて、吾々はつねに商業資本にぶち當る』<sup>20)</sup>といひ、更にはまた『疑もなく「支那の謎」を解く鍵は……商業資本と高利貸付資本のアジャ社會に及ぼせる影響の下に横はつてゐる』<sup>21)</sup>と言つてゐるのは、全く正しい。然し乍ら、支那社會のあらゆる氣孔に入り込んで不斷の活躍をつづけてゐる商業資本も、たゞ官吏資本に依附してのみ成長し得たといふことは、マデヤール氏の理解の遙か彼方に横はつてゐる。以上の意味に於いて、私は、宋以後の支那社會經濟を所謂商業資本主義の系統と秩序とを保つてゐると呼ぶのであるが、かくの如き經濟秩序の下に、支那社會は、宋から清末にいたる約一千

20) L. Madjar, a. a. O. S. 164.

21) L. Madjar, a. a. O. S. 163.

年のあひだ、搖ぎなき中華の帝國としてほど同一の状態にとゞまり限りなき反覆をくりかへしてゐた。然るに、清末の五口開港は、この状態に部分的變化をあたへて、從來みられなかつた新たな生産系統が之に入り込むことゝなつた。そこで私は、こゝに二つの解答すべき問題にぶち當る。すなはち、第一は一千年もの長き期間を經過しつゝも、何故にこの商業資本社會が、自ら産業資本社會に轉じ得なかつたかの問題であり、第二は、清末以後に於ける支那社會經濟の他動的・部分的資本主義化は、從來の官吏資本に如何なる影響を及ぼしたかの問題である。私はこゝで、此らの諸問題に詳細なる答覆をなす餘裕をもたないから、たゞ簡單に、提起された此らの問題にふれるの外はない。第一の問題をとく鍵は、私にあつては、支那の國家がその社會と遅くとも隋以後幾何學的な平行線を描きつゝ夫々發達したといふこと、換言すれば、支那の社會經濟層が支那政治の粗放的・徳治的統一の網の目から逸脱したまゝ獨自の發達をとげたといふ點にある。惟ふに近代國民經濟の完成に當つて決定的に重要な役割を演ずるものは、近代國家の成立とその意識的・計劃的統一作用であるが、かゝる近代國家の統一作用は、後進諸國家に於ける近代國民經濟の樹立には特に重要だからである。

第二の問題にたいする私の答はかうである。支那に於ける諸産業部門の部分的な近代化は、官吏資本の存在を覆さなかつたのみでなく、却つてこのものゝ助力を必要としたといふことである。例へば、梁士飴の交通機關にたいする、又熊希齡の中國實業銀行に於ける關係をみよ。更に張學

良の遼寧紡紗廠や純益纈織公司にたいする投資を思へ。一言でいへば、官吏資本は自ら獨立してか、それとも外國資本或は買辦資本と相提携してか、ともかくその何れかの形において、資本主義化する支那國民經濟の分野にも依然として重要な任務をつくしてゐる。従つて、この事の理解なくしては、廓大なる前資本主義的經濟交通の秩序の中に、極めて弱い幾條かの線を描きつゝ、縦横に走つてゐる資本主義的經濟秩序の基本的な特質を把握しえないであらう。

#### 四、答覆と批判

以上に於いて、私は、支那社會の隅々にまで擴大した交通經濟が、官吏資本を最高の統一者とすることによつて完全なる有機的體制をなしてをり、この有機的體制のあらゆる結び目を潜つて、商業資本が華々しい活動をなしてゐる事を見た。この意味において、宋以後一千年の支那社會經濟を商業資本の秩序下に在ると呼びうることも亦、すでに述べた。然るに、支那社會の交通經濟を商業資本の系統と秩序との下にあると見ることに對しては、マルクス主義左翼の理論家達から、全く破壊的な且つ分析的な論難が痛烈に浴びせかけられてゐる。従つて、私が以上の見解を固執するためには、私は一應これらの諸批判にたいして答覆しなければならぬ義務を負ふ。

そこで先づ、此らの理論家達が、如何なる根據に立つて、如何なるものを批判の對象とするかをみなければならぬが、彼らが立つ論據は言ふ迄もなく商業資本に關するマルクスの見解である。

従つて、マルクスの商業資本理論を先づ瞥見しなければならぬが、マルクスの見解は、かうである。商業資本とは、いふ迄もなく商品流通を取り扱ふことを任務とする資本が、特殊な流通負擔者の手に集中せられて獨立した資本を意味するのである。<sup>1)</sup> かくの如き商業資本は、資本主義社會にあつては、單なる産業資本の再生産行程であり、且つその總生産過程の一階段であることは明白であるが、然らば、前資本主義社會に於ては如何。マルクスは此の問題に答へて、『古代世界に於ては、商業の作用と商人資本の發達とは、常に奴隷經濟に結果した。また起點の如何によつては、直接的生活資料の生産を目當とせる一つの家父長的奴隷制度をば、餘剩價值の生産を目當とせる一つの家父長的奴隷制度に轉化するといふに過ぎぬこともあつた。近代世界に於ては、それが資本制生産に結果して行く。そこで、此らの諸結果そのものは、商人資本の發達とは全く別個の諸事情によつて制約されたものだといふことになる。』<sup>2)</sup>と言つてゐる。ドブrowsキーの言葉をかりていへば、資本前期に在つても、獨立のそして支配的な資本としての商業資本は、如何なる種類の生産方法の基礎の上にも發生しうるから、それは特に一個の特定な生産方法と結びついてゐない。<sup>3)</sup> すなはち商業資本は、それ自體として、何らそれ特有の生産社會を構成し得ないのであつて、つねに生産自體によつて支配されるものである。然し乍ら、封建社會の末期と資本主義社會の前期との中間に於いて、この反對の事實を認めうるが、それは飽く迄も例外的な且つ一時的な現象であつて、如上の一般的原理を否定することゝはならぬ。商業資本は、かくて、一定の生

1) K. Marx, Das Kapital. Bd. III. Ht. 1. Hrsg. von F. Engels. S. 250.

2) K. Marx, a. a. O. S. 316. 譯文は高島氏改造社版による。以下同じ。

3) S. Dubrowski, „Über das Wesen des Feudalismus, der Leibeigenschaft und des Handelskapitals“ — Agrar-Probleme. Band II, Heft 2, 1929. S. 234.

産方法に常に依據してのみ存在しうる。然し乍ら商業資本が舊き生産社會に働きかけ、それに何らかの解體作用を及ぼし得ないと考へることは、マルクスによれば決定的な誤謬を犯すものである。それ故に資本論は『商業は享樂及び生活を、生産物の直接の作用よりも、むしろ販賣にかゝらしめ、かくすることによつて、生産を益々交換價值の下に従屬せしめるであらう。これがために舊來の諸關係は分解さるゝ』<sup>4)</sup>と明白にかいてゐる。然し乍ら、この解體作用には商業資本自體の本質から歸結せらるゝ必然的な一定の限度の存することは言ふまでもない。<sup>5)</sup>

以上は商業資本に關するマルクスの見解の輪廓であるが、これがマルクスの見解であるが故に、支那國民經濟の研究に従事するマルクス主義左翼の理論家達が直ちに依據する所の理論でもある。かゝる理論にたつて、此らの諸家は、支那の社會經濟が早くから所謂商業資本主義の統制下にあるとする見解にたいして、『紀元前六〇〇年より……商品生産及び商業資本の發達により發達を繼續した』<sup>6)</sup>る如き『奇怪なる社會』はあり得ないと批判し、もしありうるとすれば、それは『恰も孫悟空の如くに、一飛び十萬八千里の空馳ける術を會得してゐる』所の神秘難測の魔物としてのみ存在すると非難するが、かく非難するそれらの諸家は、では、如上の理論を、支那國民經濟なる現實體に即して、如何なる具體的内容のものとして把握するか。換言すれば、それらの諸家が、商業資本主義説を否定して、直截に封建説を主張する具體的根據をなすものは何であるか。

列舉的にいへば、第一は支那の農業に附隨する幾多の封建性である。次は、すでにふれたる如

4) K. Marx, a. a. O. S. 314.

5) K. Marx, a. a. O. S. 316.

6) 陶氏『中國社會の封建性』68頁、前掲誌。

7) 逸歷氏、前掲論文、70頁、滿鐵支那月誌、第四十一號。



く、原則外のものとして、商業が生産を支配するの時期は、家内工業の繁榮時代であるが、この時代に於ける特徴的な諸現象は支那に存在しないといふことである。具體的にいへば、家内工業の繁榮時代は、同時にまた重商主義の時代である。然るに重商主義時代は、重商主義なる表現がその當然の内容として包含する輕農重商の時代であり、また中世都市に蟠居してゐたギルド組織の解體時代であり、更に貨幣の統一時代である。此らの諸現象が存在しないとすれば、商業資本の支配なる事實を認定するに由もないが、支那に在つては、事態は正に逆である。支那に於ける二十四朝の爲政者が一貫して抱懷せる對庶民政策は、重農貴粟の政策、すなはち輕商賤工の政策であつたし、また今なほ支那社會の重要な統制力となつてゐるものは、搖ぎなき且つ普遍的なギルドの存在である。また、貨幣制度に何らの統一もなく、各種の實質的・地方的・排他的貨幣が雜然として流布する。それ故に、現實に於ける支那社會の交通經濟は、未だ封建的經濟秩序に支配されてゐるとの結論に此らの諸家は到達する。

そこで以上の見解に對して一應の吟味を試みねばならぬが、第一の點については、すでに簡單に私見をのべた。従つて、こゝでは第二の點についてのみ取扱ふことにするが、然し第二に屬する問題のすべてを詳細に取り扱ふことも、到底いまの場合私のなしうる所ではない。それゆゑに、便宜上こゝでは吟味の範圍を、ただ重商主義政策とギルド組織にのみ限ることゝして、此ら二つについて簡單なる私見をのべ、併せてそれらの諸家の批判乃至論難に答へるであらう。

8) 逸歴氏、前掲論文、35—69頁。滿鐵支那月誌、第四十三號。朱其華氏、前掲書、278頁、290頁、310頁等。山名正孝氏、前掲論文、532—8頁。田中忠夫氏、前掲論文、並に同氏『貨幣制度よりみたる支那社會の封建性について』東亞經濟研究、第十四卷第一號、50—8頁。

まづ重商主義政策についてあるが、商業資本主義時代の歴史的意義が重商主義政策にあるといふこと、並に支那に有史がその明白なる姿を展開し始めてから、今日にいたるまでかつて一度も重商主義政策の行はれたことがないと云ふ事は、これらの理論家等の指摘せらるゝ通りである。従つて、私が宋以後一千年の長きに亘つて、支那の社會經濟を支配せるものは、商業資本であつたと主張することは、極めて明瞭なる矛盾なるかに見ゆる。然し乍ら、私には、支那社會の交通經濟が宋以後賣買流通の系統と秩序にいり込んで商業資本の支配をうけつゝも、尙ほ重商主義政策を體驗したことがないと云ふことは、何らの矛盾もなく合理的に把握せらるゝ。何故にか。

惟ふに、十六・七世紀のヨーロッパ諸國に重商主義政策の採用を可能ならしめまた必然たらしめた基本的事情は、從來全國の各地に夫々孤立して存在してゐた幾多の領域内に閉ぢこめられて夫々に個別的な發達をなしつゝあつた社會の相互經濟が、更に高度の發達をなすことによつて、全領土の隅々にまでその範圍を擴大したため、遂に全國民的な規模において、統一的な系統と秩序を具備するにいたつたと云ふ事である。社會經濟は相互經濟であるが故に、本質的に自らを統制する能力をもつてゐない。従つて、このものゝ交通範圍が、全國民的規模を具ふるにいたつた後に於いては、從來の薄弱なる統制力にかふるにより、強力なより、組織的な統制者を必要とする。かくの如きより、強力なより、組織的な統制は、然しながら、中央集權國家の成立によつてのみ可能であるが、重商主義政策の名をもつて呼ばるゝものゝ本質は、まさしく、社會經濟にたいする近世國家

9) G. Schmoller, Das Merkantilssystem in seiner historischen Bedeutung: städtische territoriale und staatliche Wirtschaftspolitik; Jahrbuch für Gesetzgebung, Verwaltung und Volkswirtschaft. 1884. S. 41.

の強力な且つ組織的な統一作用の中に横はつてゐる。<sup>10)</sup> 近世國家のかゝる統一作用は、内にあつては都市・地方・階級會議等の如き古い諸政策に對する抗爭とその勝利となつて現はれ、また貨幣・度量衡・交通の全國的統一として勝利を博したのであり、外に對しては、植民地の熱狂的な獲得、保護關稅の設立、航海條例の發布等として姿を表はした。<sup>11)</sup>

以上は十六・七世紀の歐洲に行はれた重商主義政策に關する一般的な規定であるが、支那にあつては、然るに、事情は全く反對であつた。支那社會に於ける相互經濟が全國民的な系統と秩序とを具備したのは、すでにふれたる如く、隋・唐を経て宋にいたる迄であつた。また秦以後に於ける中央集權的傾向と地方分權的傾向との矛盾のうへに構成されてゐた封建政治が、單一なる近世國家の中央集權にまで統一せられたのもやはり宋であつた。然るに、この兩者の成立には、その間に殆んど何らの有機的關連が存在しなかつたと云ひうる。まづ社會經濟についてみれば、支那社會の交通經濟が孤立的な地方分散の状態から、統一的な全國流通にまで發展し擴大するに至つた後も、それ自體の力によつて獨立の發達をなしうる能力をもつてゐた。何故か。その原因は大體みに『支那社會を載せてゐる地物の狀態と支那民族の社會生活と、支那民族とその四圍の諸民族との交渉關係』<sup>12)</sup>に求むることが出来るであらう。

支那民族が始めから天恵多き富源と自然の交通路によつてその物産を容易に運搬しうる如き廣大なる平原に社會を建てたことは、自然的自由の經濟組織の建設を可能ならしめたのであり、ま

10) G. Schmoller, a. a. O. S. S. 42-3.

11) G. Schmoller, a. a. O. S. S. 47-8.

12) 作田博士『支那國民經濟の特質』前掲誌、102頁。

た支那民族の社會生活が、相互に依頼する所の信義と慣習とをその出發點としてゐたことは、彼らの社會生活の規律者として國家の政策を決して必要としなかつたのである。<sup>13)</sup>

かくて、支那の社會經濟がそれ自らを意識する迄に發達した時に、すでに先天的に自らを統制する力をもつてゐたのであるが、かゝる自律的統制は、彼らの四圍に彼らと對立し競争する如き優秀なる外民族の存在しなかつた事によつて更に強められた。十六・七世紀におけるヨーロッパ諸國の熱烈なる對外進出は、内部に於ける社會經濟の躍進的な發達が齎らした必然の結果であつたといへ、それらの對外進出とそれに伴ふ深刻な諸國家間の競争が、反對に社會經濟にたいする國家の在內的統制を益々強固ならしめた事も事實であつた。然るに、支那社會の經濟組織が一應の完成をみた時代に至つても、それがもう豐なる富源生産力の故に、自ら求めて外に進出するの要はなかつたのであり、また初期の對外通商が他動的に開かれた後に於ても、彼らに比敵する優れたる競争者が存在しなかつたのであるが、此らの事は、支那國家をして益々社會經濟に強力なかつ組織的な保護や統制を加はふる餘地をなからしめた有力な一因となつた。

以上の諸事情が主要なる原因となつて、支那では歐洲諸國にかつて見られた如き重商主義政策の出現が不可能でもあり、又不必要でもあつたが、此のことは、支那の中央集權國家の成立過程とその政治の本質をみることによつて、更に明白に理解さるゝであらう。支那國家の近世的統一が、ほど完成したのは宋の建國に於てゝあつた事は既にみだし、又この近世中央集權國家の成立

13) 作田博士、前掲論文、102—6頁。尙ほ金崎賢氏『日本支那西洋諸國の起源と性質を比較して支那將來の政治組織に論及す』北京週報、第七二號、882頁。大西齋氏『支那政治の一考察』支那、第十七卷第七號、24—5頁、參照。

には、かつてヨーロッパ諸國家の經驗したる如き抗爭乃至紛騷<sup>14)</sup>の伴はなかつたことも既に述べた。かく支那の近世國家成立の過程が歐洲諸國に於けるそれとは異なることが、重商主義政策の支那に發生し得なかつた一因であることは、すでに規定したる如き重商主義政策の本質からみて、當然なことであらう。然し乍ら更に重要なことは、かく支那國家の近世的統一がそれ特有のものであつたと云ふことや、すでに成立せる國家が對外的に何ら強力なる經濟的政策をとる必要に迫られなかつたといふ事は、既にみたる如き支那社會經濟が本質的な屬性としてもつ先天的自己統制力と共に、支那國家の消極的な機能をして益々消極的ならしめたといふことである。換言すれば、周公の昔にかへらんことは支那政治の最高理想であるが、かく德治主義を本質とする支那國家は、右にあげたる諸事情のために、いよく德治主義に傾いたのであつて、國民經濟に對する國家の統一主義政策すなはち重商主義政策の支那に出現し得なかつた主要原因の一半は、まさしくここに横はつてゐる。

以上において支那の社會經濟が、所謂商業資本主義の階程にふみ入つた後に於ても、重商主義政策の發生する餘地の存しなかつた理由をのべたが、重商主義政策の本質を單なる貨幣の統一とか、貿易の均衡に關する一二の主張に在ると考へる限り、又その本質を新興資産階級にたいする國家の階級的政策であるとみる限り、<sup>15)</sup>いつ迄もかく考へかく見る人々には支那に重商主義政策の存在しないことは、同時に支那國民經濟の古代性を立證するに役立つではあらう。が然しその限

14) G. Schmoller, a. a. O. S. 42.

15) 逸歷氏、前掲論文、35頁、前掲誌、第四二號。

16) 朱其華氏、前掲書、315頁、參照。

り、支那國民經濟の本質的理解は、それらの人々から遙かにかけ離れて存在するでもあらう。

次に、支那に於けるギルドに進むこととする。支那のギルドとしては、異郷にある同郷者の組織する會館と、同業者の結成せる公所並に前二者の要素を團結の基本とする幫とをあげらる。此らの所謂行會制度の起源に關しては、未だ信賴するに足る文献は存在しないが、大體において、公所の先行者としての『行』は、その起源を隋代にまで溯りうる<sup>17)</sup>。然し、現在の形に於ける會館及び公所の發生は、それよりも遙かに後のことであつて、大體明末清初の世にあることは一般に承認せらるゝ所であらう<sup>18)</sup>。そして、此らの行會制度が現在支那の到る所に存在するのみでなく、それらのものが中世歐洲諸國に見られたギルドと全く同一の組織をもち、同一の社會的・經濟的職能を遂行しつゝあることは、掩ひ難き事實であるが、この事實は、直ちに一部のマルクス主義者をして、支那社會の交通經濟の封建說に導く有力な根據の一つとなつてゐる<sup>19)</sup>。

すでにふれたる如く、社會團體といふ相互組織體の上に繰り展げられてゐる交通經濟は、本質的に自らを統一する能力をもつてゐない。従つて、社會經濟が、それを構成する各個經濟の相互交通によつて發生すると同時に、自らの規制者を他に求めねばならなかつたのである。此の必要を充すものとして最初に現はれたものは、ギルドであつた。従つて、ギルドは純然たる社會制度の一つであると言ひうるが、かゝる本質を有するギルドは、社會經濟がなほ全國的な統一をなさずに狭小な幾多の領域に於いて夫々孤立して存在してゐた時代に在つては、充分自ら荷負ふ役割

17) 加藤繁博士『唐宋時代に於ける商人組合「行」について』白鳥博士還曆記念東洋史論叢、342頁。  
18) 和田學士『會館公所の起源について』史學雜誌、第三十三編第十號、80頁、なほD. Macgowan, "Chinese Guilds or Chamber of Commerce and Trade Unions," — Journal of the North China Branch of the Royal Asiatic Society. 1886. new series, XXI p. 170. を併照。

を果し得たのであつた。然るに、社會經濟が自らの發達の結果、狭小なる領域を越えて全國的範圍にまで擴大するに至る時は、從來その規制者として重要な役割を演じつゝあつたギルドは、もはやその任に堪へなくなる。換言すれば、社會經濟は、ギルドの統制に代ふるに、國家のより強大なる且つ組織的な統制を必要とする。この國家の計劃的・意識的な統一作用こそ、重商主義政策そのものであるが、これを裏面からいへば、重商主義政策の出現は、同時にギルドの消滅であつたのであり、又これは必然的なことでもあつた。

以上は、歐洲諸國に於けるギルド制度についての概括的な然し乍ら基本的な規定であるが、然し如上の一般的規定は、支那社會には全くあて嵌らない。すでに私は、支那社會をのせてゐる地の物の自然的情態と、その上に生活する民族の特殊性並にこれをとり卷く四圍の事情は、支那國家の特異なる性質とからんで、先天的に支那社會の交通經濟に自律的統制を可能ならしむる能力を附與したことをみた。かく支那社會の上に展開されたる交通經濟が、先天的に自己統制をなしうる能力を有するといふ點に、支那に於ける行會制度の基礎的な特質を解説する重要な鍵が横はつてゐる。モース博士が、支那の行會制度の特徴を、歐洲のギルド組織が主として當時の國王諸侯もしくは市會の保護の下に發生せるにも拘はらず、支那に在つては、何らそれらのものとは關係なく自主的に發達した點に求めらるゝのも、恐らく以上の意味に於てであらう。繰返していへば、支那の社會經濟は自らを規制する能力を先天的に有するのであるが、かゝる自己統制力は、支那

19) 逸歴氏、前掲論文、53-65頁、前掲誌、第四十二號。李立三氏、前掲論文、56-60頁。

20) H. B. Morse, The Gilds of China. p. 19, p. 21, p. 24. 1909, Ewell.

社會の交通經濟が低きより高きへと發展するに従つて、より強力なより組織的なものたらざるを得ない。それ故に、支那の社會經濟が市場集散の系統と秩序とを整へるにいたつた時は、如上の自己統制力は始めて『行』として具體的な姿を現はしたのであり、また市場集散の經濟秩序が市面流通のそれに置きかへらるゝに及んでは、その姿をより強力なる公所・會館・幫にかへたのであつた。これは、過去に於ける支那の歴史が吾々に教へる具體的な事實である。しかも、行會制度の名の下に總稱せらるゝ公所・會館・幫は、その發生後に、支那に於ける近代政治の特殊なる機構に促進されて、獨り單純なる社會經濟の統制力たるには留らずして、支那社會を支那國家の政治的影響から防衛するための防波堤として活動するに至つたが、このことは、益々行會制度の特殊なる存在を必要ならしめた。

一方に於ける社會經濟の先天的な自己統制能力と他方に於ける政治の特殊性とは、かくして、支那の行會制度が社會經濟の發達にとまひ、いよゝゝ發達せざるを得ない基本的な根據である。それらの基本的諸原因の消滅せざる限り、よし支那の國民經濟が完全なる資本主義制をとる日が來るとするも、容易に行會制度は亡びないであらう。この立言に確實性をあたへるものとして、次の如き事例をあぐればそれで充分であらう。

第一のものは、いま新に發生しつゝある近代的諸産業には、單に宗教的要素を缺くといふ點に於てのみ從來のものと區別せらるゝにすぎぬギルドが新に結成されつゝある、と云ふことである。

21) 臨時臺灣慣習調査會第一部報告、前掲書、第二卷、508頁。



例へば、電氣業・自動車業・自轉車業等に於けるギルドの結成をみよ。<sup>22)</sup> 又それらの資本主義的諸産業の擴大せる範圍にあつては、從來の小地域的な利害以上に進み出でなかつた公所・幫・會館は、或るものは聯省的な或るものは全國民的な規模の外形を備へつゝある。商會乃至總商會にその典型的な事例をみうるが、この場合には、從來の個々のギルドが持つてゐた諸種の職能乃至機能は、商會乃至總商會に集中せられた。例へば、ギルド法廷が從來もつてゐた刑罰權は、商會の審判所に移された。<sup>23)</sup> 技藝業者や手工業者の結成してゐた幫が、いま部分的に解體してゐること並にこの解體が紛ふ方もなく支那國民經濟の資本主義化によるものであることを、私は勿論見脱しはしない。然し乍ら、これらのものゝ部分的な解體現象は、いふ迄もなく、如上の一般的質問を否定するには何らの役にも立たないであらうことを強調することも、全く正當である。

以上に羅列した諸事情を、内面的に縫ひ貫く一本の金絲は、支那に於ける共同組織體と相互組織體とが互に分離し獨立して發達したと云ふことである。この特殊性に目を注ぐことによつて、マルクス主義者が提示する重商主義政策及びギルド制度に關する疑問は、氷解さるゝであらうし、又この特質を強調することによつて、マルキストが浴せかける非難をはね返すことが出来るであらう。かつて中國共產黨の指導的な理論家と稱せられた逸歴氏が、數千年の長きに亘つて商業及び商人資本の支配する如き『奇怪な社會』はあり得ないと稱せらるゝ社會は、かくて、宋以後立派に存在しうるのである。決して孫悟空の空馳ける術を會得せる神祕難測の社會としてではなく

22) J. S. Burgess, "The Guilds and Trade Association of China." — The Annals of the American Academy of Political and Social Science. Nov. 1930, Philadelphia. p. 72.

23) J. S. Burgess, *ibid.* p. p. 79-80.

して、生ける現實の社會として存在するし、又存在しうる。私にとつて『奇怪』なことは、支那に於ける商業資本の長期の支配ではなく、現實の支那國民經濟が提示してゐるそれらの諸特質をすべて無視して、庶二無三に一律の公式をあてはめんとする果敢なる理論家諸氏の勇氣である。

## 五、結 語

こゝで私は再び、支那國民經濟の總括的な序説に立ちかへらねばならぬ。支那國民經濟は、その横の流に於ては、宋以後に急速に發達した官吏資本に促進されて、支那民族の領土を隈なく蔽ふ完全なる市面流通經濟の系統と秩序を具備するにいたり、又その縦の流に在つては、國家共同層と社會相互層の特殊なる關連に規制せられて、諸他の國民にあつては容易に見得ざる程の複雑な且つ特異の様相を示してゐる。拙論は、後者の特質に關連しつゝ主として前者の特徵を概括的に素描せんと試みたものである。然し乍ら、この拙い試によつて、支那國民經濟が四千載の長きに亘つて提示した一切の問題と疑問とが、すべて解決せられたのではなく、むしろその反對であることは、筆者自身誰よりもよく知つてゐる。このことを、再びこゝに明記しておかねばならぬ。

——一九三二年二月三日、滿鐵上海研究室にて。——